

NEZASU

教育研究所ニュースレター NO.5 1992年12月

発行：神奈川県高等学校教育会館・教育研究所 〒220 横浜市西区藤棚町2-197 電話：045-231-2546

連続の視点

研究協力員 小山文雄



大正15年3月1日。

東京朝日新聞は、「今年の議会はいわく三百万円事件、いわくスパイ問題、いわく五千円事件等百鬼夜行の有様であるが」と前置きして「怪文書事件」を詳報した。

それは、数年来取沙汰されてきた大阪の松島遊廓移転に関わるもので、政府筋と土地会社の間にはすでに秘密契約があり、近く移転許可がでる、それをめぐって多額の運動費がばらまかれ、政治家が土地会社と結託して暴利を貪ろうとしているとするものであった。この文書の印刷・配布を実行した三人は逮捕され取調べ中であったが、その過程から、移転については政友会、政友本党、憲政会の三大政党に関係者が居ると噂され、政友会元総務岩崎勲や憲政会総務箕浦勝人などの名が浮びあがってきた。

感想を求められた無所属の尾崎弴堂（67）は次のように語った。

「今の政党の入費はみんな財閥からとってゐるのだ。たまたま松島遊廓からとった金の事が表面の問題となったからとて、今更驚くに足りぬ。政党は始終その手をやって党の入費としてゐるのだ。つまり常々犯罪的行為をやっているのだ、これは公然の秘密として人も我も許してゐる。私が政党費を公開せよとする理由はここにあるので（中略）今度の問題を機会にぜひ政党費途の公開輿論を高めてもらひたい」

3月19日、土地会社と政治家との仲介役をつとめ運動費を受けとったとして平渡信（弁護士）が拘引され、ついで27日、岩崎代議士も拘引、収監された。その容疑は、移転は不可能と知っていたとされ、詐欺罪を適用しようとするものであった。

※

※

※

4月20日。

東京の青山会館で、後藤新平(69)による「普選に直面して政治の倫理化を提唱す」の大演説会が開かれた。官僚から政界に転じ、逋相、内相、外相などを歴任し、東京市長も務め、「後藤の大風呂敷」と世にはやされた後藤は、すでに政界第一線からは離れていたが「政治の倫理化」運動を最後のご奉公と決めていた。

まず司会に立った阪谷芳郎は、日本の政治家が政見を行うにあたって、「影に潜み或は奥深く隠れて、色々な手段方法を以て他の党派を崩したり、或は人を誘引したり、陰険と申さうか、陰謀と言はうか、どうも甚だ公衆一般から了解の出来ないやうな手段方法」を取るのを通例としているなかで、いま、まず天下公衆に訴えて、その理想が是認されたならば、それによって政治の行詰まりを打開しようとする後藤の行動は、憲政史上初めてのことで、後の政治家の範となるべきことを力説した。ついで後藤が登壇した。

後藤は言う。いま、普通選挙法の公布によって千二百万人もの新有権者が生れ出ようとする時、従来の選挙のたびに既成政党が醸成してきた弊害を新有権者に感染させないように防止し「従来の未熟政党流に、其の過を飾り其罪を群衆心理に帰するやうな風を改め、自ら身を以て革新に任じなければならんと申すのが、私の本意の存する所であります」

拍手を受けて後藤は語をつぐ。世界大戦後、全世界の富力はアメリカに集まり、世界の政治の中心は大西洋沿岸から太平洋に移ろうとしている。その「太平洋時代」の幕開けに日本はどういう世界政策を持とうとしているのか。全世界の強国が「激甚なる石油戦争」をくりひろげ、また「無線電戦」や「飛行戦」の競争に没頭している中で、日本はつねに劣勢の地位に置かれてはいないか。

一方、国内の思想傾向に目を転じれば、「日本古来の伝統を尊重する方々は、偏狭固陋なるショウヴィニズムに陥り易く、近代世界の進歩を謳歌する人々は、浅薄なる唯物史観に囚はれる者が多く、彼此相率ゐて今日の日本の思想界に忌むべき弊害を醸して居るではありませんか。物質主義に偏重するの結果として、上下交々利を争ふて国危しと云ふまでに至りたるに非ざるかと思ふのであります」——拍手おこる——。

こうした国民精神、その根本を毒したものはなにか。それは、

「『政治は力なり』と申す言葉であります。延ては我党内閣などといふ非立憲を臆面もなく放言するなど、国民に害毒を流すこと甚しといはねばならぬ（拍手）。すなはち、政治の根本はただ現実的の力であると申すのであります。而て、その力と申す言葉の解釈が或は、権力、情実、或は、金力、或は、暴力であって、これを獲得するのが政党の究極の目的であって、それが為めには、何等の手段も選ばないと申すことが、今日通用いたして居る物質主義の政治思想であります。百弊の端は、実に茲に発すると、我輩は考えるのである（拍手）」

後藤はこうして「政治の倫理化」の急務を説き、聖徳太子に触れ、アメリカのルーズベルト大統領の政界革新運動を称揚し、転じて政治と科学の関係を論じ、説き去り説き来たって倦むところを知らない。

「現在の政党は立憲政党と云って居るけれどもそれは名のみで、皆封建政党である。即ち頭数民本政治で多数横暴を本尊として横紙破を以て政党の本領とする」、しかし、それはもはや時代錯誤でし

かない。政治は力、という時代は去り、今や、政治は奉仕、の世の中である。力から奉仕へ、それは倫理観念こそが政治の本体となったことを意味する。そうした予感の中で、すでに15年前に翻訳出版したパウルゼンの『代議制と政党』から、党争の浄化に関する4原則を大声する。「一、党争は須らく誠意を以てすべし。二、戦闘は宜しく公正の武器を以てすべし。三、敵の人格を尊重すべし。四、党派よりも国家全体を重んずべし」。これを「出来得ない相談」とする「通人氣取」こそが、「利慾と権勢とのために相結ぶところの私党」を跋扈させるのだと痛撃した。そして、「政党政治革新後援運動万歳」の音頭により、聴衆これに和して、講演は終わった。

この日の演説を第一声として政治倫理化運動は進められ、実行機関としての「普選準備会」が設立され、公正な有権者、とりわけ純真な青年男女への檄が飛ばされたのである。

ちなみに、初めての普通選挙は2年後の昭和3年2月20日に実施された。そこでは無産派から8名の当選が際立ったが、総体としてみれば、「『来て見れば左程にもなし富士の山』との感あり」(三宅雪嶺)、であった。

※

※

※

4月22日。

箕浦勝人は、警視庁の警部補らに付きそわれて東京から大阪に至り、任意の形で大阪地方裁判所検事局に出頭した。箕浦は第1回議會から連続当選の憲政会顧問、前通信大臣という政界きっての長老で「高潔清廉の士」と言われていた。すでに72歳であった。その収監は社会に大きな波紋を描いたが、憲政会の横山幹事長は、「党に関係なく、政府に関係なく、単なる個人の私行に過ぎないから、政局に波瀾を起こすごときことにならないのは言を待たない」(東京朝日新聞)と語った。

箕浦は、「知人からツイ頼まれるままに話してやったのが陥ち込みのもとで……」と語り、「私の終生の失敗であった」と悔悟し、29日に面会にきた子息を通じて、位勲返上と公職辞退のうえ、政界を引退すると表明した。30日、検事局は詐欺罪で起訴した。6月に入って、政友本党の高見之通も同じく詐欺罪で起訴され、その取調べの経過から、床次政友本党総裁も13時間に及ぶ事情聴取をうけた。

11月、事は若槻礼次郎首相(憲政会総裁)にも及ぶこととなった。最終尋問の際、箕浦は、松島遊廓移転について政府にその意思があり、当時内務大臣の若槻から、知事の許可申請が出れば必ずしも不許可にはしないという確言を得ていたことを明らかにした。

8日、検事局は予審判事を急遽上京させ、若槻首相からの事情聴取を行った。ところが若槻証言が箕浦の主張と異なったことで、箕浦は若槻を偽証罪で告訴した。前代未聞のことであった。ついで岩崎勲も若槻首相および中川大阪府知事を偽証罪で告訴した。

12月28日、予審が終結した。箕浦、岩崎、高見の三代議士と弁護士の平渡信ほか2名はいずれも詐欺罪で有罪となり、本訴に付されることとなった。この時、「大正」はすでに終り、「昭和」と改元されて3日を経ていた。

ちなみに、岩崎は本訴第一審までに病没し、昭和2年10月13日の判決では、箕浦・高見の二代議士とほか1名は無罪、平渡ほか1名は懲役1年6月と6月をそれぞれ言い渡された。判決への感想を求められた長谷川如是閑は次のように語った。

「政界の元老尊重には同情出来るが、今日の場合同情よりも寧ろ政治的規律が一層考慮されねばならない。政界の元老が加様な問題に触れたといふことは寧ろ罰さるべき理由にこそなるだらう」(東京朝日新聞)

※

※

※

これより先、8月20日。

真夜中の1時ごろ、千葉県香取郡久我村の荷馬車挽き岩淵熊次郎(35)は、同村の旅館岩井長松方に侵入、雇い女吉沢けい(27)を出刃包丁で殺害、目を覚ました長松(52)も惨殺、さらに豪農菅沢宅に放火し全焼させて逃走した。恋の恨みの犯行であった。警察は非常線を張り、消防団の応援を得て付近の山を包囲して捜査中、消防団員と警察が重症を負わされ、熊次郎を取り逃がしてしまった。

8月23日、東京日日新聞は犯人について次のように報道した。

「犯人岩淵熊次郎は本年七月十日、千葉地方裁判所八日市場支部に脅迫、傷害、詐欺等数罪俱発で未決監に収容されてゐた重大刑事被告人であり、喧嘩、傷害の常習犯として凶暴な人物であるのに、某政党の地方有志、同村の村会議員有志等数名、同人の告訴取下げと刑の軽減請願運動を司法当局に試みた結果、今月十八日、懲役三ヶ月、執行猶予三ヶ年の恩典に浴し当日帰村とともに、即夜この惨虐を演ずるに至ったものなので、これに対し同地方民一般は、かかる凶暴にして毫も改悛の情なき智能犯人を、政党員等の運動によって司法官が情実的猶予処分にしたからこんなことになったとして、司法当局に怨嗟の声を放つものが多い」

一旦、東京方面に高飛びした熊次郎は、27日夜印旛郡遠山村に現れたが取り逃し、31日再び姿をみせてたちまち森林の中に消えた。9月1日、大がかりな山狩りが四千人によって行われたが成果なく、同地方は極度の人心不安に陥った。10日夜、熊次郎は飯をもらいに久我村に現われ、翌日は張りこみの中の巡査を殺害、15日には兄の家を訪れたが、これも間一髪で逃してしまった。警察は、手にあまる場合は射殺してもよいとピストル携行を内命した。こうした大捜査網を敷いたがぬかりが多く、30日にいたって墓地の近くで熊次郎を発見したが、駆けつけた時にはすでに自殺を図って虫の息で、昼ごろ絶命、40日に及ぶ事件は終った。のちに伝えられたところによると、兄がストリキニーネ入りの最中を食べさせ、墓地まで運んだということであった。

裏切った女への復讐からはじまったこの大惨劇は、世に鬼熊事件として喧伝された。一地方の一人の事件に44日間かかった捕り物は、警察官の延動員数6899人、費用総額33428 円、飛行機まで出動するという稀有のものとなった。

三宅雪嶺は、「奇怪なる事件の起こる時は、奇怪なる事件の続出すと見え」と、この年大正15年を「奇怪」をもって感想とした。

ちなみに、平成4年7月30日早朝、川崎市中原区の市立病院で婦女暴行容疑者に逃走されるという事件が起こり、8月4日昼に再逮捕したが、県警察本部がこれに動員した警察官は4000人、パトカー300台、ヘリコプター1機で、手配書12万部を配布、つづいて80万部を再配布した。この年も、トラック運送会社などをめぐる政治献金事件で、政界は大揺れに揺れていた。(了)

教育研究所だより

教育総研「EC統合と教育改革」調査団

日教組・教育総研(国民教育文化総合研究所)が、初の国際交流事業として、「EC統合と教育改革」調査団の派遣を企画し、参加者を募集している。調査団の企画書は、その目的をつぎのように述べている。「92年末に市場統合が行われるECは、これまでの国民国家の枠を越え、ヨーロッパ「合州国」をめざす、壮大な「歴史的実験」を始めています。今世紀末までには中央銀行を創設するなど、新たな地域統合を含む大きな社会変革が進みだします。その過程で、教育・文化の改革も進んでいます。とりわけ人間中心の教育・科学・技術をめざす教育改革、労働・社会運動が発展しています。フランス、ドイツ、イタリアを訪ね、その動向を調査研究し、私たちの教育改革運動への示唆を得ることを、目的とします。」日程は、1993年3月11日・12:00成田発、3月21日・10:15成田着。